



山で採取した野生ランが売られるエルバジェの市場。自然保護区での天然資源の採取は法律で規制されているが、すべてを取り締まるのは難しい状況にある

止まらない不法採取

首都パナマ市から車で西に約1時間半。1000メートルを超える山々に囲まれた、緑豊かな盆地の町エルバジェに到着する。人口は4000人ほど。年間を通して20〜30度という快適な気候のため、避暑地や別荘地として人気が高く、国内外から多くの人々が訪れる。

日曜日の朝、町の市場は観光客や売り子でにぎわっていた。毎週末、ここには周辺の山岳地域に住む人々が、観光客を目当てに野菜や果物、工芸品などを売りに来る。ふと目を向けると、色とりどりのランの花が所狭しと並ぶ店がいくつもあった。「山の熱帯雨林から不法採取された野生のランです。絶滅危惧種もこ



国際協力の担い手たち

COSPA (パナマ野生ラン保護活動)

ランを守り山岳住民の生活を支える

世界的にも貴重なパナマの野生ランが、今、生活のために不法採取する人々によって危機に陥っている。COSPAは人々にランの栽培技術を指導するとともに、エコツーリズムを活用しながら、その保護活動に努めている。



絶滅危惧種のエスピリト・サント。COSPAでは、オーナー制度を設けてこの花の保護を呼び掛けている。最近では、パナマの元青年海外協力隊でもあるCOSPAのメンバーが職場で声を掛け、一企業の社会貢献事業として保護に協力するなど、日本でも支援の輪が広がっている



05年、愛知万博で、優れた環境技術を持つ企業やNGOに贈られる「愛・地球賞」を受賞。明智さんも現地のメンバーと喜びを分かち合った

APROVACAのメンバーにランの栽培方法を指導する明智さん

こに含まれています」。複雑な表情を浮かべながらそう話すのは、COSPA (パナマ野生ラン保護活動)の明智洗一郎さん。「ランを市場で売って1日に得る収入は、一家の主が別荘番や草刈をして手にする日当の約5倍。貧しい山岳住民にとって、野生ランは生活の糧を得るための簡単な方法なんです」。

国土が熱帯雨林に覆われ、豊かな生態系に恵まれるパナマ。特にランは、このエルバジェと周辺の山々を中心に多くの種類が生育し、その数はパナマ固有種も含め1500以上に上る。だが今、この世界でも例を見ない花の園では、開発によって熱帯雨林の伐採が進んでいるのに加え、長年の山岳住民による採取が原因で、野生ランの個体数が急速に減り続けている。「以前は至る所で見られた花が、最近は市場で見掛けるだけになった」といった観光客や町の人々の声が最近も多く聞かれる。

そんな貴重な野生ランを守ろうと、COSPAはここエルバジェで、絶滅危惧種の栽培・保護に取り組んでいる。活動のきっかけは2000年、明智さんがシニア海外ボランティアとしてこの地に赴任したことだった。定年前まで、農業関連の企業に勤めていた明智さん。初めて目にするさまざまな野生ランに魅了される一方、不法採取に歯止めが掛から



APROVACAが運営に当たっている保護センターの入り口。訪れる観光客も徐々に増えている

「花を育て、植生地に戻すだけでは不十分。野生ランに代わる別の生計手段を見つける必要がある、そう考えたんです」

「状況を衝撃を受けた。そこで、住民自らが保護を進めることを目的に、「ラン生産者協会 (APROVACA)」と、その活動の拠点となる「ラン保護センター」を設立。スタッフに住民を雇用し、将来山に戻すことを目的に育てる絶滅危惧種の栽培方法や、住民が野生ランの代わりに市場で売ることのできる人工培養によるランの生産技術を指導してきた。

「花を育て、植生地に戻すだけでは不十分。野生ランに代わる別の生計手段を見つける必要がある、そう考えたんです」

帰国後、明智さんはAPROVACAの運営を助けるため、日本側の支援組織となるCOSPAを設立。日本からボランティアを派遣し、APROVACAの運営体制を整備したり、保護センターの一部を改修し、栽培中のランを観光客に見てもらえるようにするなど、支援を続けてきた。

そして08年から、COSPAがJICAの草の根技術協力を通じて準備してきたのが、野生ランの保護と山岳住民の生計向上を目的としたエコツーリズム。自然保護区を巡り、多種多様な野生ランを堪能してもらおうという内容だ。住民を雇い、エコツアーガイドとして養成したほか、けもの道同然だった自然保護区の山道を整備し、入山者の監視を行う管理者を配置した。さらに、パンフレットやホームページを作成するなど広報活動にも力を入れた。

発展はまだまだこれからだが、受け入れ体制が整ったことで日本からのスタディーツアーも組まれるようになるなど、今後さらに活

エコツーリズムで知る 自然の価値

性化が期待できそうだが、保護センターには年間1000人を超える観光客が訪れており、入場料の収入が入るようになり、APROVACAの運営も安定しつつある。そして何よりも、以前はランを採るばかりだった住民の間に、新たな仕事へのやりがいと誇りが芽生えている。

明智さんが初めてエルバジェを訪れてから10年。たくさん日本人ボランティアや現地の人々の助けを得ながら、今も年に一度は両国を往復し、活動を続ける。「ランの保護やエコツーリズムを通じて、自分たちの周りにある自然の価値、そして自然の保護が自分たちの生活に有益であるということに、一人でも多く気付いてほしい」。そんな願いとともに、この地が野生ランの楽園に戻る日のことを、今日も夢見ている。



整備された山道を歩くエコツーリズムの参加者

